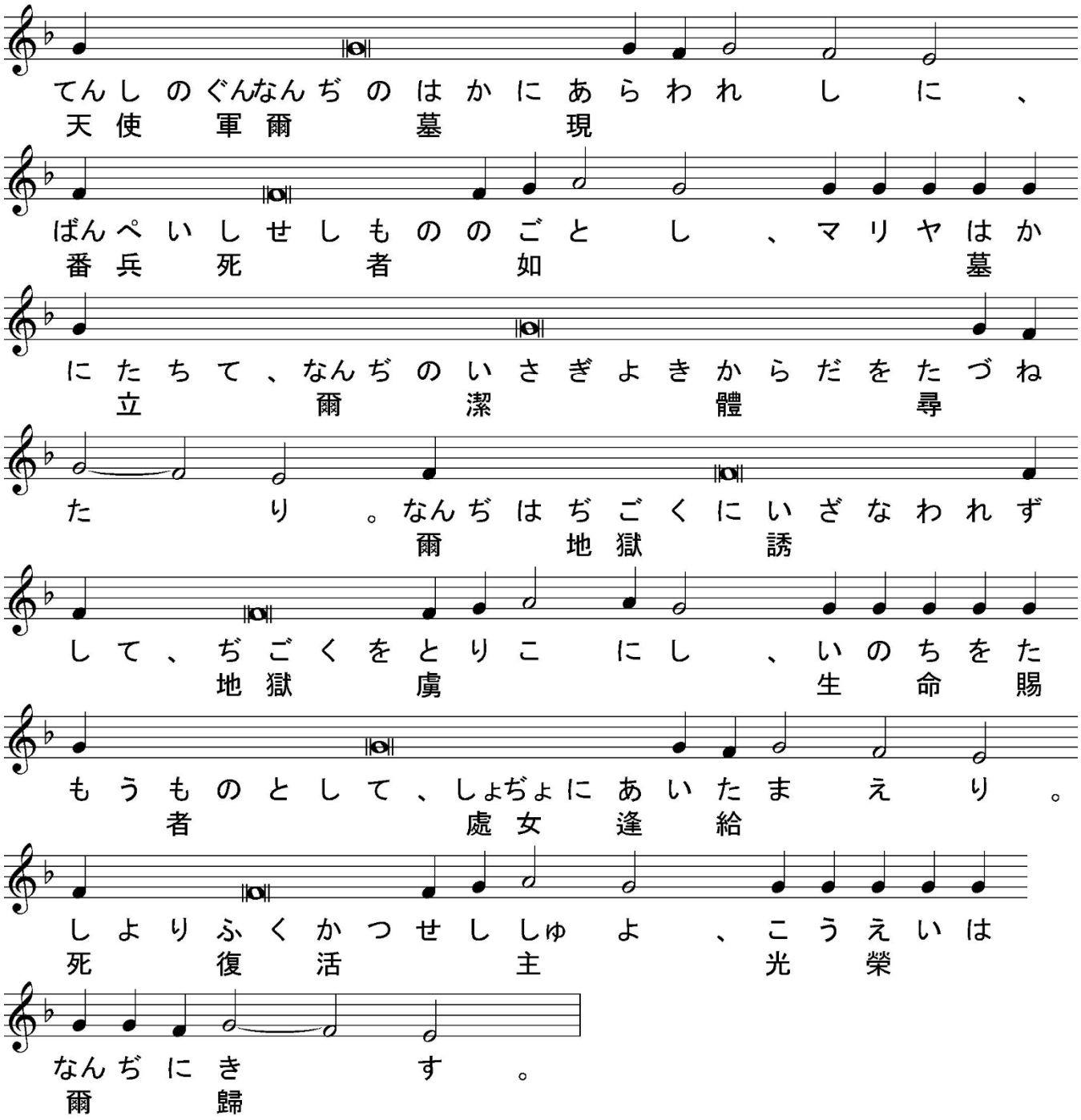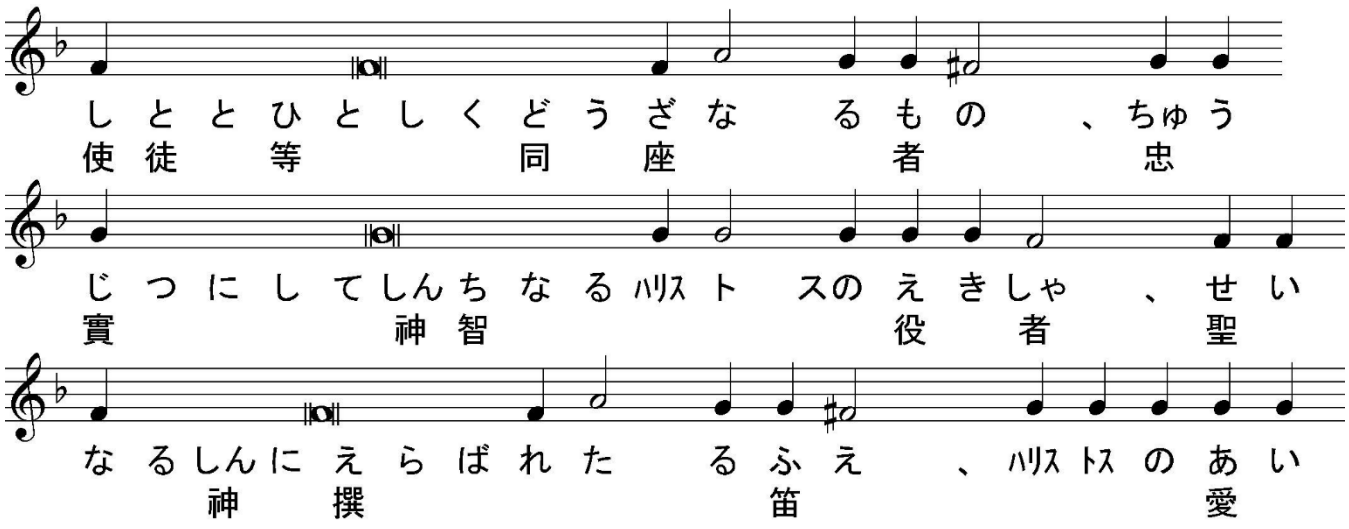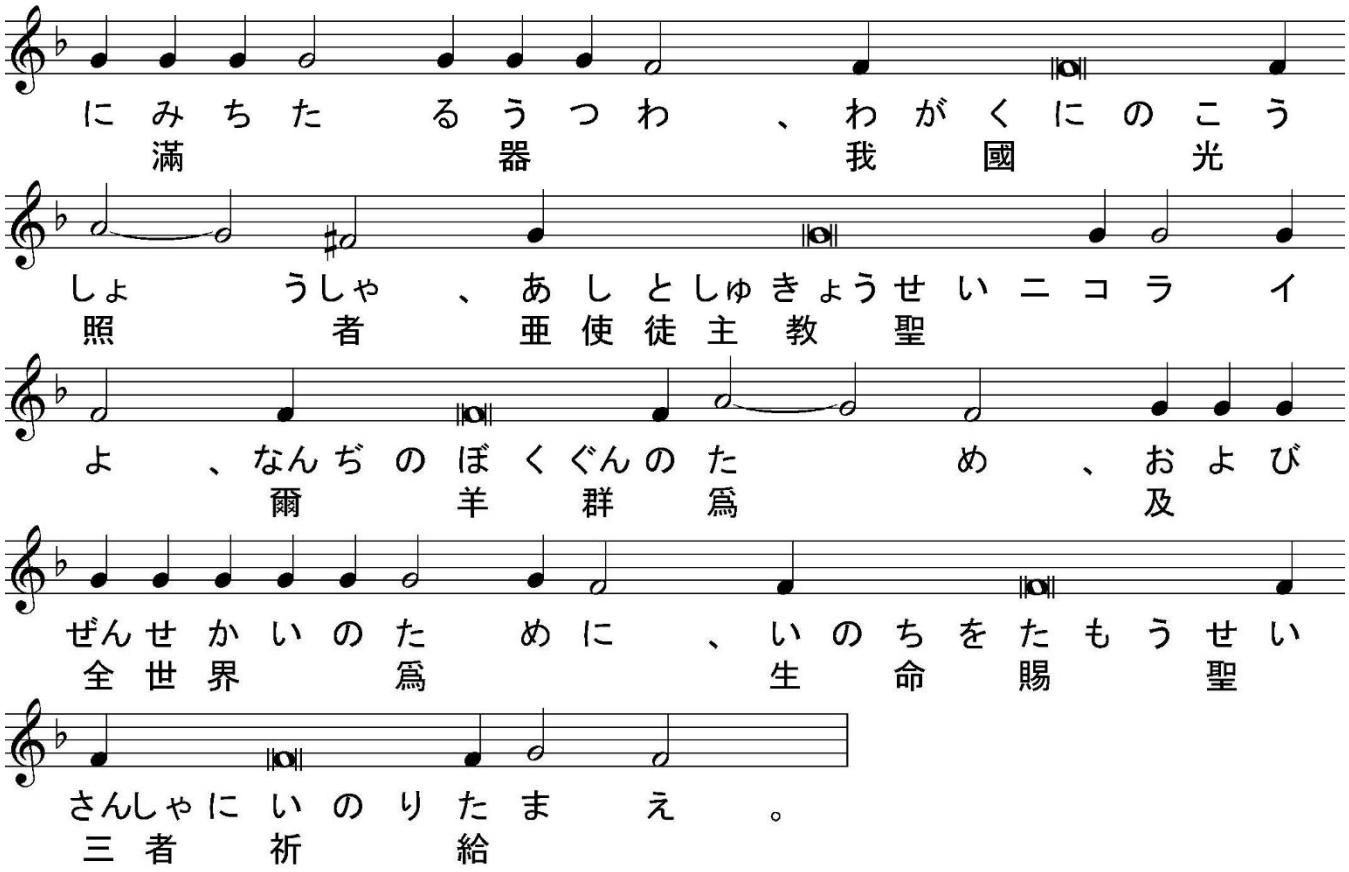【　復活のトロパリ　第６調　】
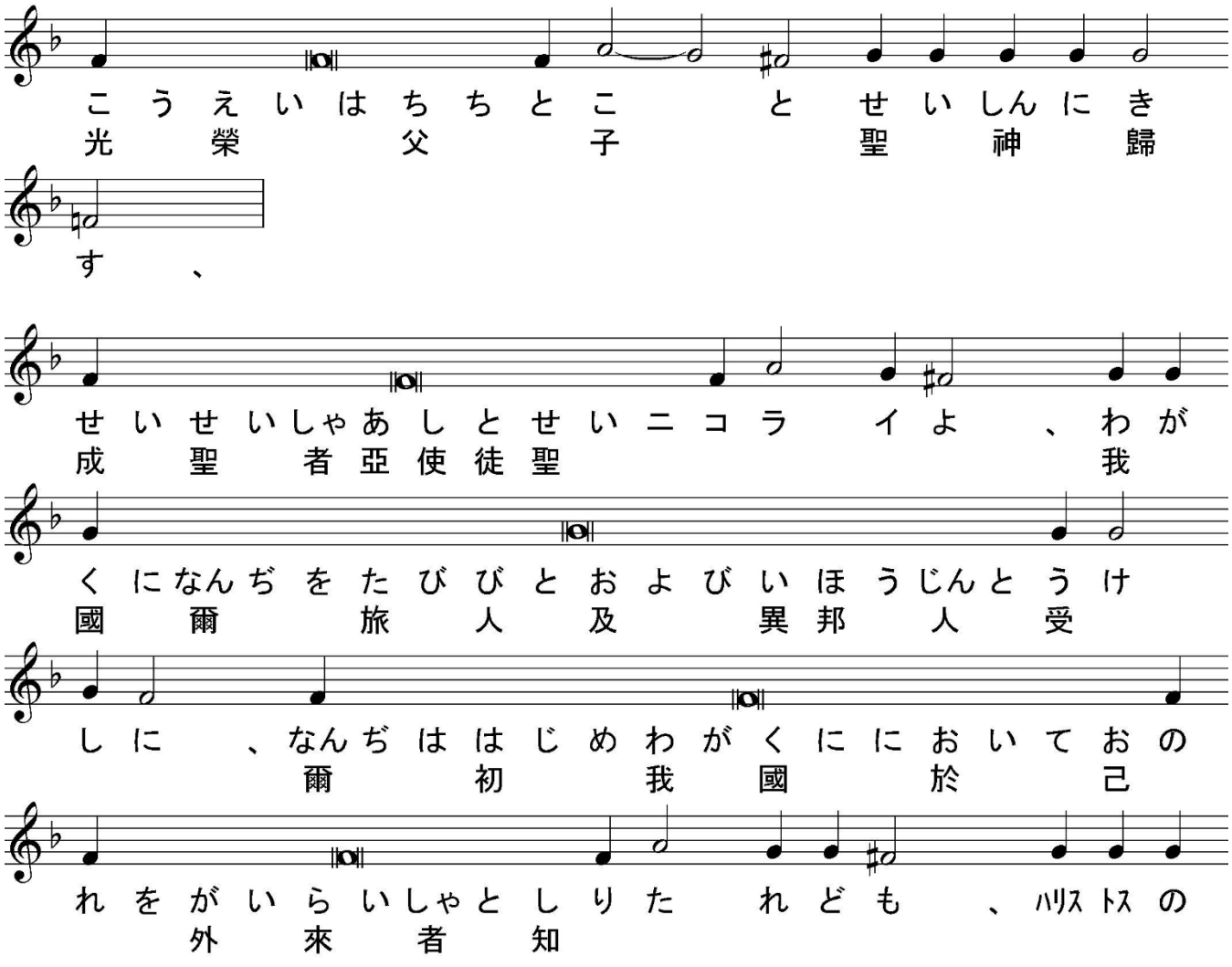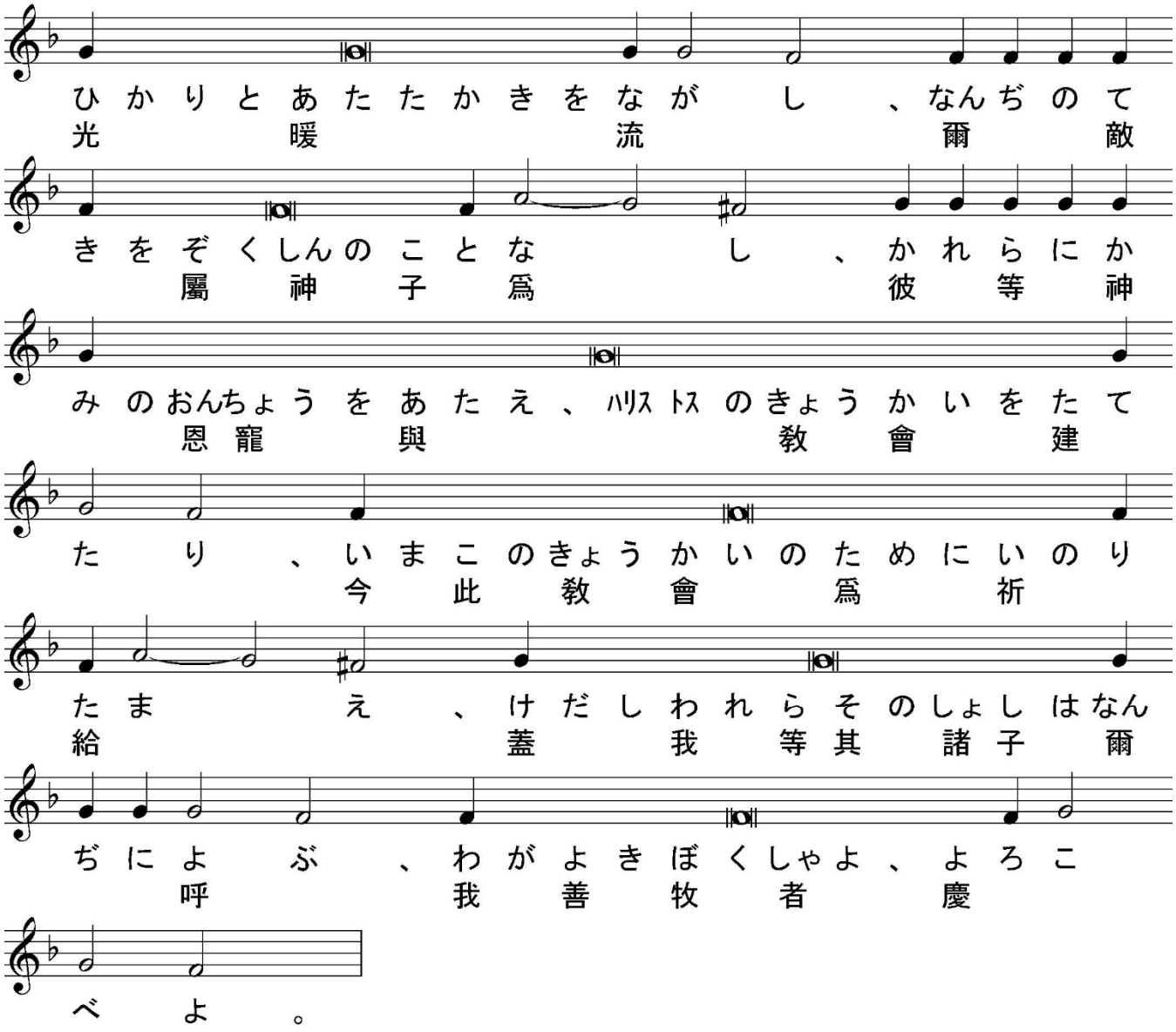


【　日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ　第４調　】
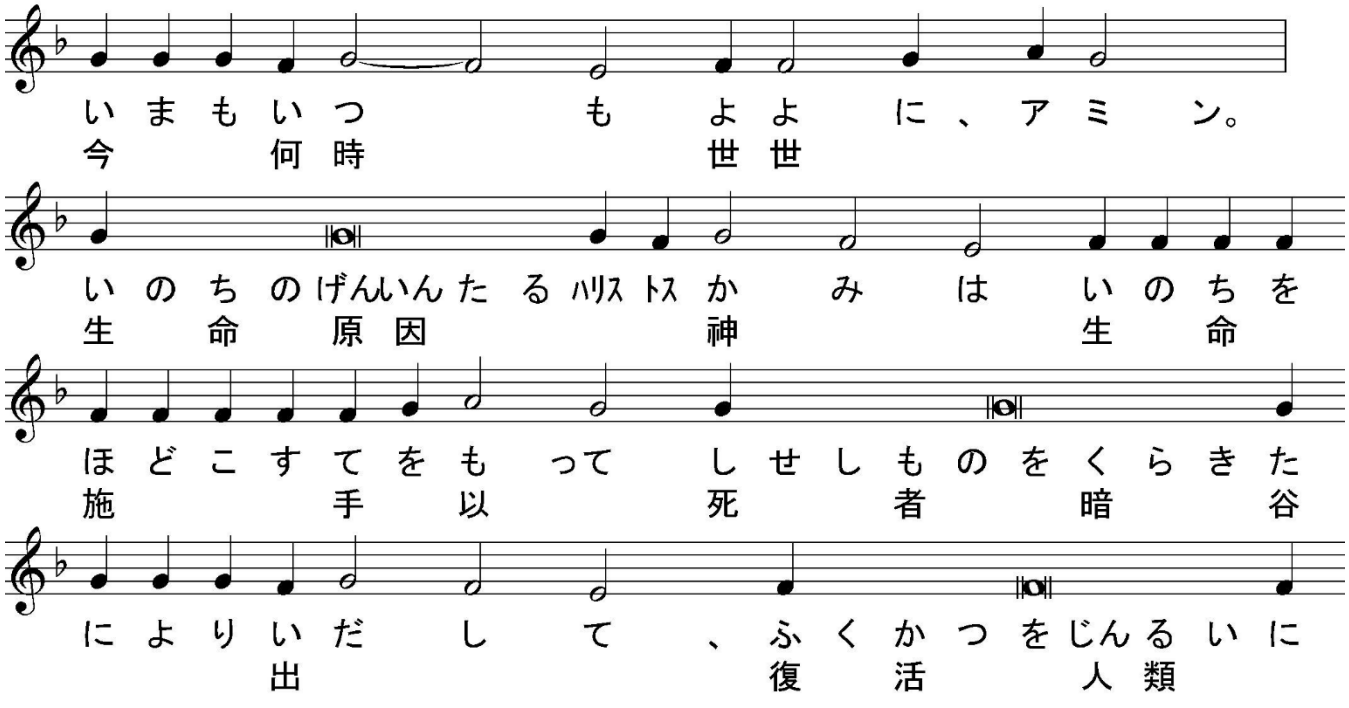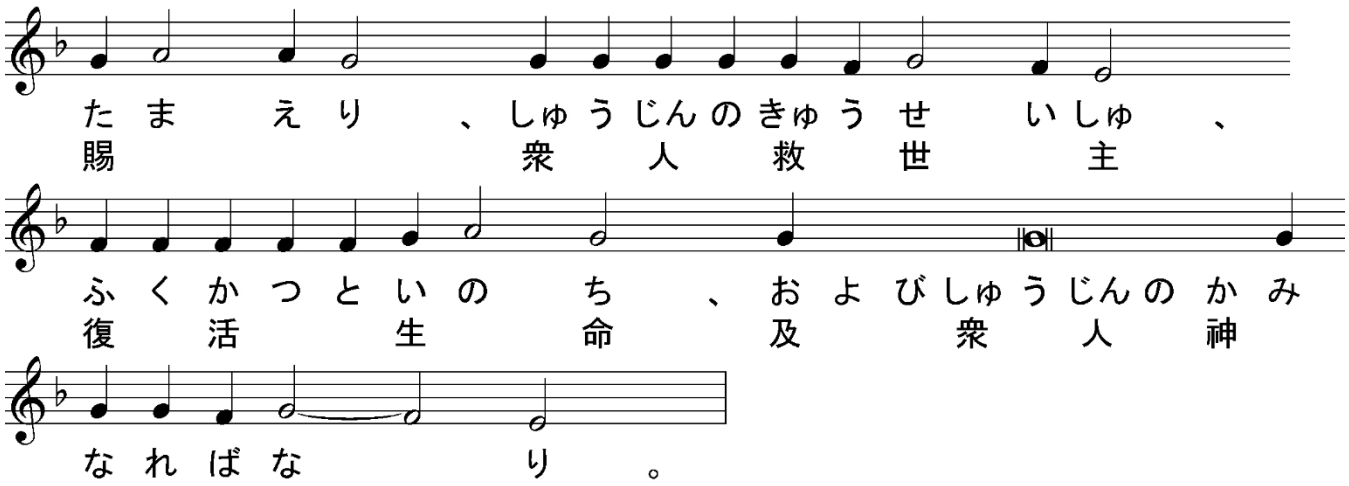




【　日本の亜使徒聖ニコライのコンダク　第４調　】




ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖流爾敵
きをぞくしんのことなし、かれらにか
屬神子爲彼等神
みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩寵與教會建
たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今此教會爲祈
たまえ、けだしわれらそのしょしはなん
給蓋我等其諸子爾
ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼我善牧者慶
べよ。
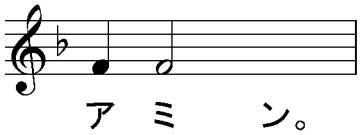
【　復活のコンダク　第６調　】


いまもいつもよよに、アミン。
今何時世世
いのちのげんいんたるハリストスかみはいのちを
生命原因神生命
ほどこすてをもってしせしものをくらきた
施手以死者暗谷
によりいだして、ふくかつをじんるいに
出復活人類

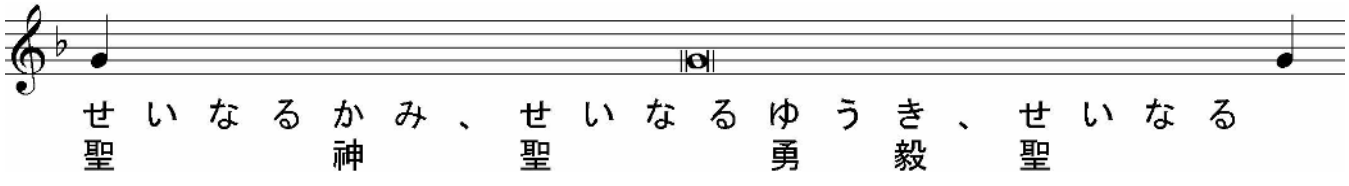


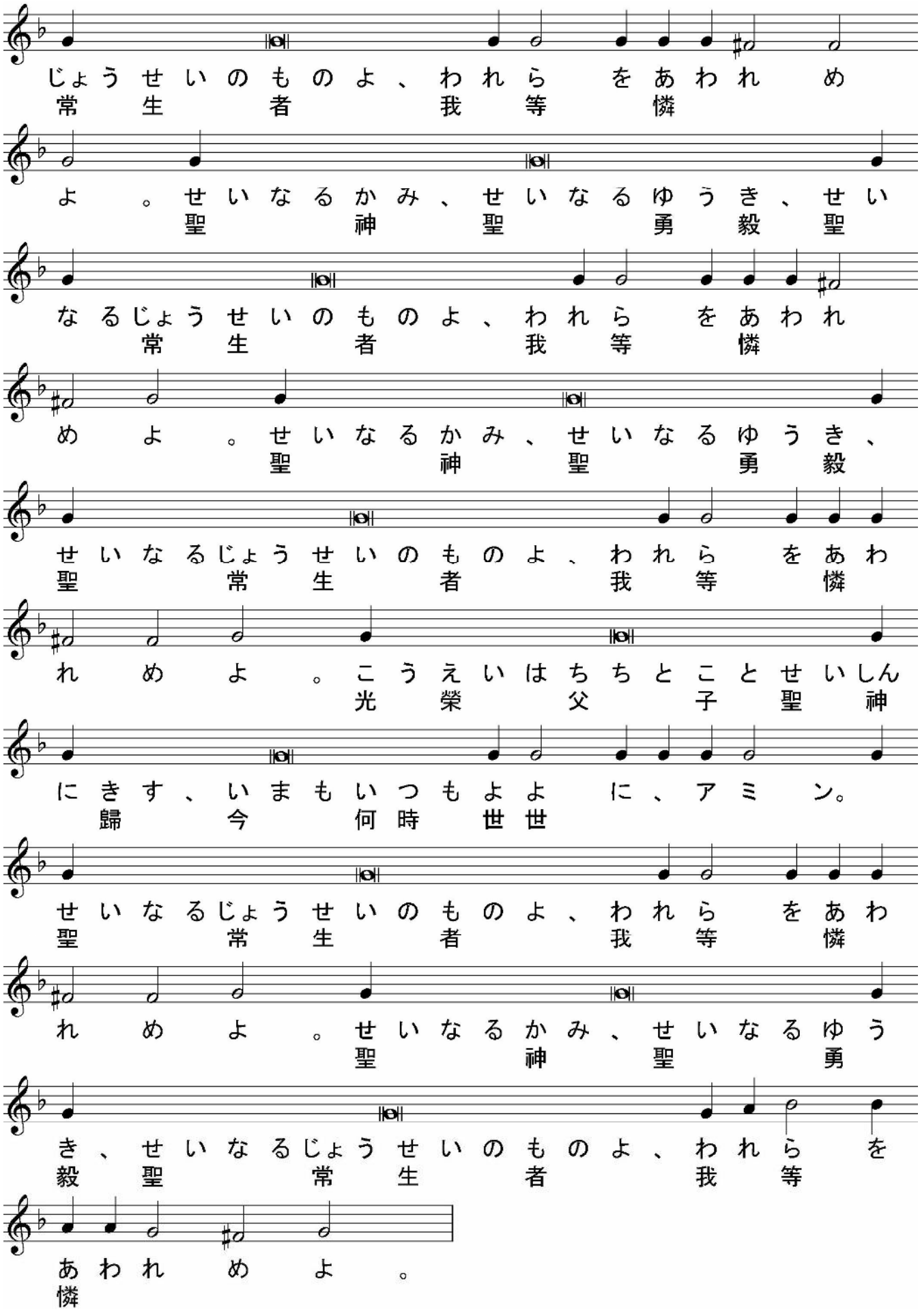
司祭)（ 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、）

司祭) **蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、**



【 聖三祝文 】





司祭)（　黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、　）
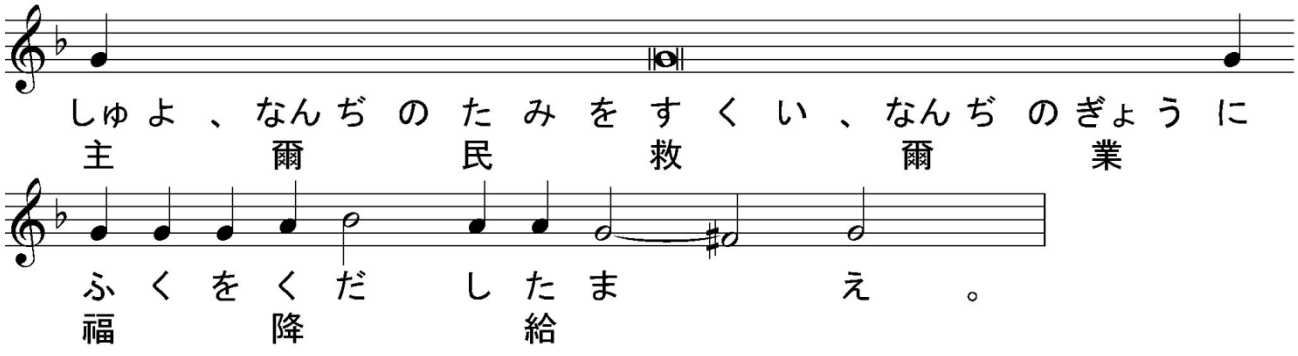
【　提綱（プロキメン）　主日第６調　】

司祭）慎みて聽くべし、衆人に平安、
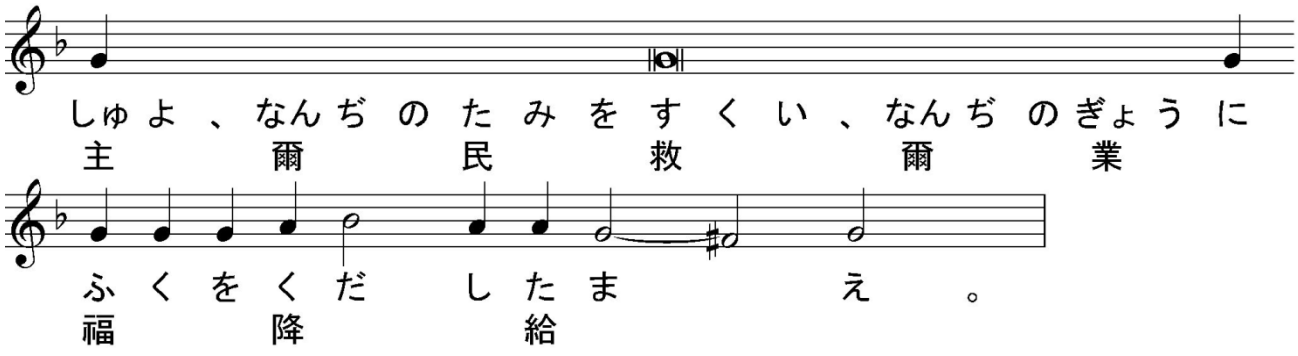
誦經）爾の神にも、

司祭）睿智、
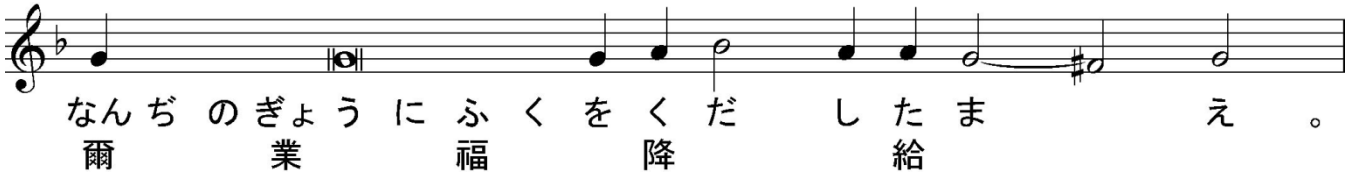
誦經）プロキメン、第六の調、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、



誦經）主よ、我爾に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に黙す毋れ、



誦經）主よ、爾の民を救い、



【　使徒經（アポストロス）　220端　エフェス書２章４節～10節　】

司祭）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがエフェス人に達する書の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、矜恤に富める神は、其我等を愛する大なる愛に縁りて、我等罪に由りて死せし者をハリストスと偕に生かせり、爾等恩寵を以て救われたり、彼と偕に復活せしめ、ハリストス・イイススに在りて天に坐せしめたり、未來の世に於て、其ハリストス・イイ

ススに在りて我等に施しし仁慈を以て、恩寵の溢れたる富を示さん爲なり。蓋爾等は恩寵を以て信に由りて救われたり、是れ爾等に由るに非ず、神の賜なり、行に由るに非ず、人の誇ることなからん爲なり。蓋我等は彼の造りし者にして、ハリスト・イイススに在りて善き功の爲に造られたり、即神が我等の行わん爲に、預め備えし所なり。

＊＊

（比較用　口語訳）兄弟たちよ。あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし――あなたがたの救われたのは、恵みによるのである――キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。

＊＊

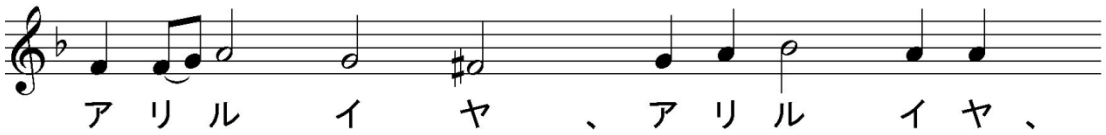
【　アリルイヤ　主日第４調　】
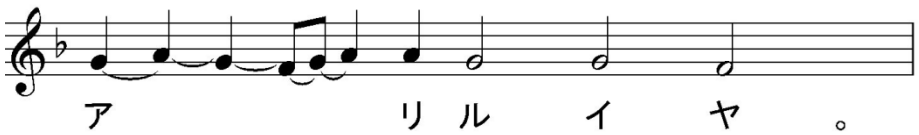
司祭）爾に平安、

誦經）爾の神にも、

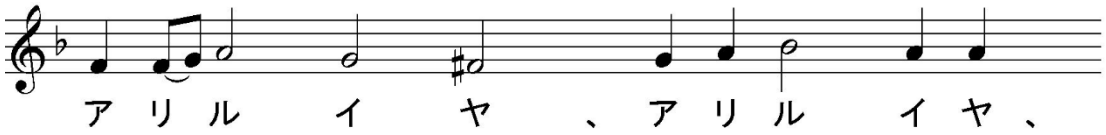
司祭）睿智、
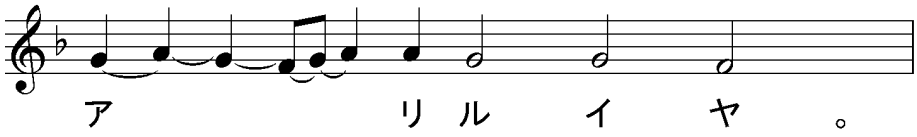
誦經）アリルイヤ、



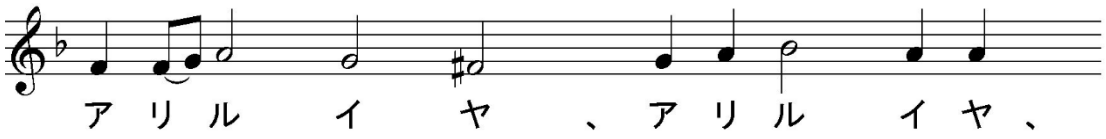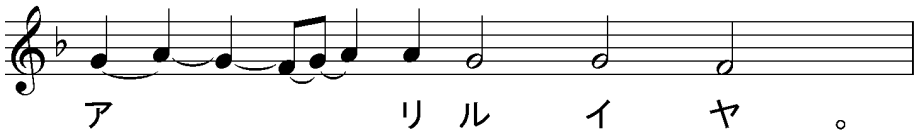


誦經）神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、





誦經) 爾(なんぢ)は義(ぎ)を愛(あい)し、不法(ふほう)を惡(にく)めり、

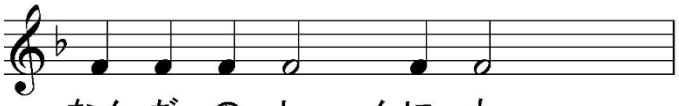




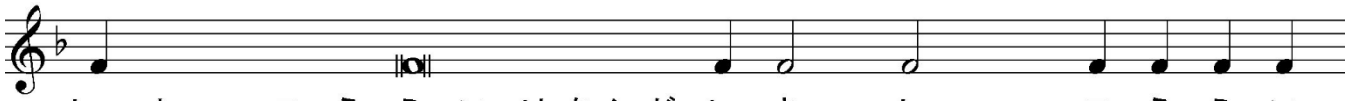
司祭) (默誦: 人(ひと)を愛(あい)する主宰(しゅさい)よ、我(わ)が心(こころ)に神(かみ)を知(し)る智慧(ちえ)の浄(いさぎよ)き光(ひかり)を輝(かがや)かし、我(わ)が思念(しねん)の目(め)を啓(ひら)きて、爾(なんぢ)が福音(ふくいん)の教(おしえ)を悟(さと)らしめ給(たま)え、我(わ)が衷(うち)に爾(なんぢ)の福(ふく)たる誡(いましめ)を畏(おそ)るる畏(おそれ)をも入れて、我等(われら)が悉(ことごと)くの肉體(にくたい)の慾(よく)を踏(ふ)み、凡(およ)そ爾(なんぢ)の喜(よろこ)ぶ所(ところ)を思(おも)い且(か)つ行(おこな)いて、屬神(ぞくしん)の生活(せいかつ)を過ぐるを致(いた)させ給(たま)え、蓋(けだし)ハリストス神(かみ)よ、爾(なんぢ)は我が靈と體との光照(こうしょう)なり、我等(われらなんぢ)爾(なんぢ)と爾(なんぢ)の無原(むげん)の父と至聖(しせいしぜん)至善にして生命(いのち)を施す爾(なんぢ)の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世(よよ)に、アミン。)
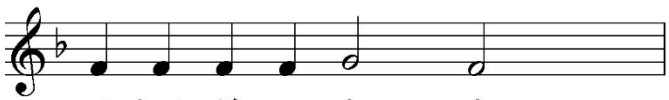
【 福音經(エヴァンゲリオン) ルカ福音書 83 端 16 章 19～31 節 】

司祭) 睿智(えいち)、肅(つつし)みて立(た)て聖福音經(せいふくいんけいき)を聽くべし、衆人(しゅうじん)に平安(へいあん)、



司祭) ルカ傳(でん)の聖福音經(せいふくいんけい)の讀(よみ)、
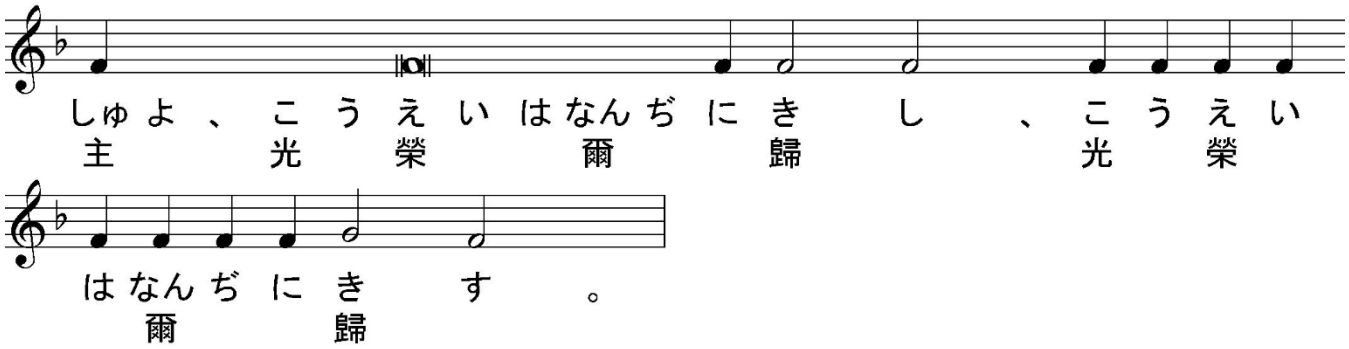




司祭) 謹(つつし)みて聽(き)くべし、主は左(ひだり)の譬(たとえ)を設(もう)けて曰(い)えり、富(と)める人(ひと)あり、紫袍(むらさきのうわぎ)と細布(ほそきぬの)とを衣(き)、日日奢(ひびおご)り樂(たのし)めり。亦貧(またまづ)しき者ラザリと名(な)づくるあり、全身腫物(ぜんしんしゅもつ)を病(や)みて、富(と)める

人の門に臥し、其食卓より遺つる屑を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其腫物を舐れり。貧しき者死して、天使等に因りてアヴラアムの懐に送られ、富める者も死して葬られたり。地獄の苦の中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアヴラアム及び其懐に在るラザリを見たり。乃呼びて曰えり、父アヴラアムよ、我を憐み、ラザリを遣して、其指の尖を水に蘸して、我が舌を涼さしめよ、蓋我此の燄の中に苦む。然れどもアヴラアム曰えり、子よ、爾は存命の時爾の善を受け、ラザリは同じく其惡を受けたりしを憶え、今彼は此に慰み、爾は苦む。第此のみならず、爾等と我等との間に巨なる淵は限れり、故に此より爾等に渉らんと欲する者は能わず、彼よりも我等に渉るを得ず。彼曰えり、然らば父よ、請う、ラザリを我が父の家に遣せ、蓋我に五人の兄弟あり、彼をして其前に證を爲さしめよ、彼等も此の苦の處に來らざらん爲なり。アヴラアム之に謂う、彼等にモイセイ及び預言者あり、之に聽くべし。彼曰えり、否、父アヴラアムよ、然れども若し死の中より彼等に往く者あらば、彼等悔改せん。アヴラアム曰えり、若しモイセイ及び預言者に聽かずば、縦い死より復活する者ありとも信ぜざらん。

＊＊

（比較用　口語訳）ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが、ラザロという貧乏人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをしのごうと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧乏人がついに死に、御使たちに連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげて言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。アブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている。そればかりか、わたしたちとあなたがたとの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもできない』。そこで金持が言った、『父よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来ることがないように、彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』」。

＊＊



※　聖体礼儀③（金口イォアン）へ